



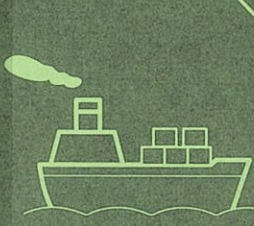
男女平等参画について考える

日本女性会議

2017 とまこまい

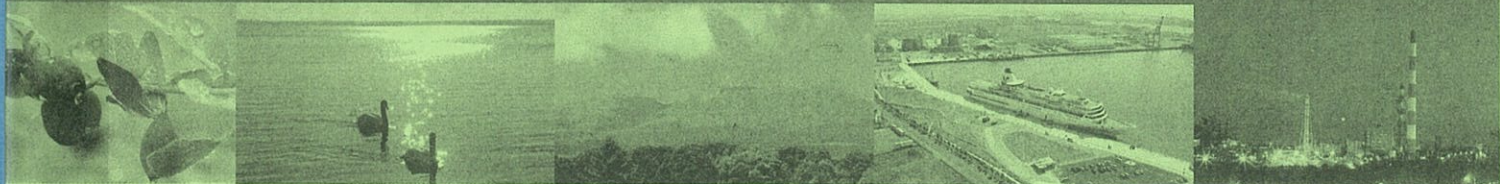
10/13 FRI 14 SAT 15 SUN

TOMAKOMAI CITY, HOKKAIDO



30.1.7
日黒区男女平等・共同参画センター

北の大地で語ろう これからの未来の一步を



2017年10月
13日
(金)

13:00 開会式
13:30 特別揮毫・講演
15:00 基調報告
15:30 記念講演
18:00 交流会

2017年10月
14日
(土)

9:30 分科会
12:30 アトラクション
13:00 特別講演
14:10 分科会報告
14:30 記念シンポジウム
16:00 閉会式

2017年10月
15日
(日)

エクスカーション

[会場] 苫小牧市民会館・苫小牧市文化会館・グランドホテルニュー王子 ほか

10月13日(金)

13:00~13:30	開会式 (受付 11:30~)
13:30~14:30	特別揮毫・講演
15:00~15:30	基調報告
15:30~16:30	記念講演
18:00~19:30	交流会

会場 苫小牧市民会館



611997

開会式 13:00~13:30 (受付 11:30~)

特別揮毫・講演 13:30~14:30

ちがいはかけがえのない個性 ~ダウン症の娘と共に生きて~



金澤翔子さんは、ダウン症という障がいを持って生まれましたが、母泰子さんの嘆きをよそに、周りの人たちに優しい光と愛を注ぐ子どもに成長しました。
 泰子さんの教えにより5歳から始めた「書」は、それを見た多くの人に感動を与え、親と子がこれから生きていくための大きな希望となりました。
 泰子さんが、これまでの体験を語った昨年のプレ大会は、多くの人に、「障がいとは何か」「ちがいは何か」を気づかせてくれる内容でした。
 今大会では、翔子さんの心をこめた揮毫と泰子さんの講演により、参加された皆さんと「ちがいはかけがえのない個性」を共有していきたいと思っています。

金澤 泰子 ※写真左

東京芸術大学評議員
日本福祉大学客員教授

金澤 翔子 ※写真右

書家

基調報告 15:00~15:30

男女共同参画に関する最新の状況を報告します。(内閣府男女共同参画局)

記念講演 15:30~16:30

夢見る力 ~つながる幸せ~

山形県から舞台に恋をして上京。たくさんの人と出会い、支えあいながらいまも舞台の活動を続けています。「夢見る力」が、自分自身の幸せとなり、幸せが広がって、大きな輪となり未来へつながっていく……。誰もがいきいきと暮らせる社会を考える上でのヒントを実体験から生まれる等身大の言葉でお話していただきます。

渡辺 えり 劇作家 演出家 女優

山形県出身。舞台芸術学院、青俳演出部を経て、1978年より「劇団300(さんじゅうまる)」を20年間主宰。解散まで、劇作家・演出家・女優をつとめ、多くの話題作を発表した。
 1983年「ゲゲゲのげ〜達魔が時に揺れるブランコ」で第27回岸田戯曲賞、
 1987年「餘の女〜まだ見ぬ海からの手紙」で第22回紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。
 その後、舞台だけでなく、ドラマ、映画、エッセイなどの執筆活動、コンサート、情報番組でコメンテーターをつとめるなど、活躍の場を広げている。
 近年の出演作は、舞台「三益」「黒家家の娘」テレビ「100の資格を持つ女」など。
 今年1月には、作・演出の新作「鯨よ！私の手に乗れ」を東京シアターラムにて公演。



会場 グランドホテルニュー王子

交流会
18:00~19:30

地元音楽家が奏でる音色で皆様をお出迎えいたします。北の海、北の大地からの新鮮な食材を活かしたお料理とお酒をご堪能いただき、全国からお集まりの皆様と交流のひとときをお楽しみください。水揚げ日本一の苫小牧港のホッキ貝や、不老長寿の実ハスカップのデザートなど、苫小牧ならではの味をご用意して皆様をお待ちしております。また、開会前にほっと一息、茶席でおくつろぎください。

10月14日(土)

9:30~11:30 分科会 (受付 9:00~)
 ※詳細は中面をご覧ください
 12:30~12:50 アトラクション
 13:00~13:50 特別講演
 14:10~14:30 分科会報告
 14:30~16:00 記念シンポジウム
 16:00~16:30 閉会式

分科会 9:30~11:30 (受付 9:00~)

会場 苫小牧市民会館

アトラクション 12:30~12:50

特別講演 13:00~13:50



渡る世間は嘘ばかり… “格差社会を打ち破る” ~思考停止の世の中、あきらめないで本質をつく~

“俺たちみんな宇田人…” “すべての子どもには無限の可能性がある。そして、大人も高齢者もその可能性を
 つなげていかななくてはならない”
 障がいの有無を越えて、一人ひとりの個性が生かされ、生きがいを感じながら生活できる男女平等参
 画社会の大切さについてお話をさせていただきます。
 子どもの可能性を信じ、家族に寄り添い、決してあきらめない姿勢で取り組んできた、小児脳神経外科医
 としてのこれまでの経験から、参加者の皆さんに“大人変われば まち変わる”ことを感じていただきます。

高橋 義男 とまこまい脳神経外科、岩見沢脳神経外科、大川原脳神経外科病院、
 別海町立病院の小児脳神経外科・小児神経・小児リハビリテーション部長

分科会報告 14:10~14:30

分科会の設定理由と分科会で話し合われた内容をまとめて報告します。

記念シンポジウム 14:30~16:00

「とまこまい発 男女平等参画社会を語る」 ~輝くオールとまこまい“市民・団体の力+企業の力+行政の力”~

男女平等参画社会の実現には、市民・団体、企業、行政がそれぞれの役割を認識し、責務を果たし、
 相互に連携することが重要です。日本女性会議を開催する“北の大地”から、これまでの歩みとこれからの
 の決意を語り、地域で実践するためのメッセージとして、全国へ発信します。



コーディネーター
神田 道子
 東洋大学 名誉教授

シンポジスト
高橋 雅子
 日本女性会議2017
 とまこまい実行委員長
 苫小牧男女平等参画
 推進協議会会長

シンポジスト
出光興産株式会社

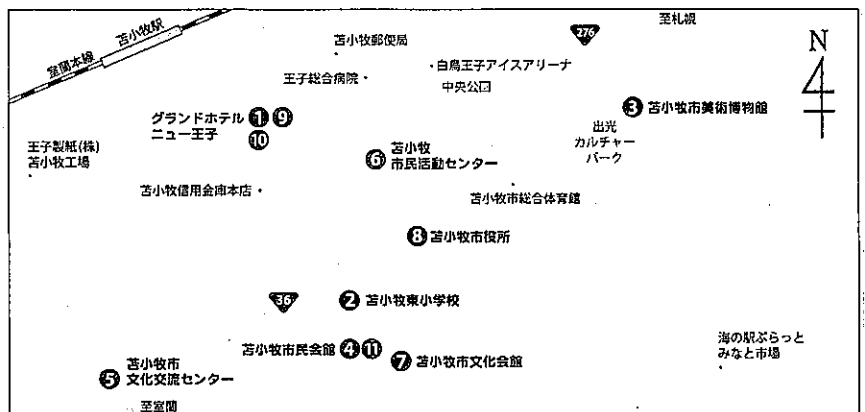
シンポジスト
苫小牧埠頭株式会社

シンポジスト
岩倉 博文 苫小牧市長

閉会式 16:00~16:30

分科会会場の位置図

- ①⑨⑩ グランドホテルニュー王子 (4分)
- ② 苫小牧東小学校 (11分)
- ③ 苫小牧市美術博物館 (20分)
- ④⑪ 苫小牧市民会館 (14分)
- ⑤ 苫小牧市文化交流センター (16分)
- ⑥ 苫小牧市民活動センター (10分)
- ⑦ 苫小牧市文化会館 (17分)
- ⑧ 苫小牧市役所 (15分)



※()内は苫小牧駅からの所要時間(徒歩)

日本女性会議 2017とまこまい に参加して

目黒女性団体連絡会

新婦人目黒支部 増渕 則子

男女平等参画センターとは？組織もわからない私が、このような重要な会議に参加して良いものかと思いましたが、とにかく日本の現状を知るために参加をさせて頂くことになりました。

目黒区からは2名参加で柏木さんとは会場で合流することになり、現地まで慣れない一人旅でした。千歳空港では、各地から到着した参加者の皆さんが集まり、この人達と会議に参加すると思うと緊張と期待が高まりました。北海道の広大な景色を眺めながら、シャトルバスが苫小牧市内に入ると開催を表すオレンジののぼりが道路沿いに見えて、市を挙げて会議に取り組んでいる様子がわかりました。

メイン会場の苫小牧市民会館に到着すると大勢のスタッフの方々が歓迎をして下さり会場内は参加者であふれていました。

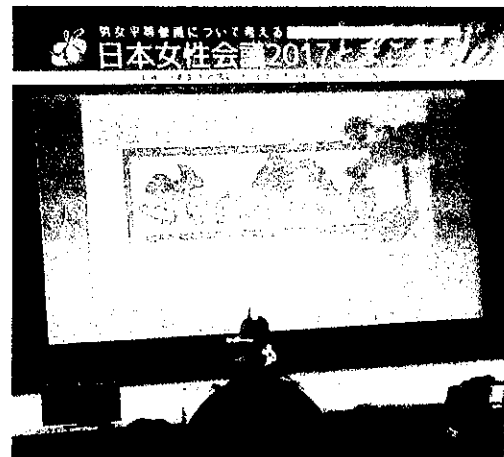
熱気の中で“北の大地で語ろう これからの未来の一步を”テーマに開会式が始まりました。主催者である岩倉博文苫小牧市長のあいさつは、「イランカラプテ」アイヌ語のこんにちは、で始まり、34回目をここで開かれることの喜び、多くの市民ボランティアの協力でこの日を迎えたこと、平成25年に北海道で初めて「男女平等参画都市」宣言をし、これを機会にさらに男女平等参画社会の実現に向け市民・団体、企業、行政が一体になり新たなスタートになると話されていました。

男女平等参画に真摯に取り組んでいこうとする熱意が感じられました。

印象に残った講演は“ちがいはかけがいのない個性ーダウン症の娘と共に生きて”と題して書道家金澤翔子さんの特別揮毫と、母親である東京芸術大学評議員の金澤泰子さんの講演でした。

始めに書道家翔子さんの「共に生きる」の文字を書く様子を拝見しました。翔子さんは合掌をして精神統一後、大きな太い筆を抱え、丁寧に大胆に筆を動かしていました。観ている側も筆先に集中。傍らで母親の泰子さんが手助けしながら見守っている姿も印象的でした。書かれた文字は力強くまさに翔子さんの意思が表われていました。

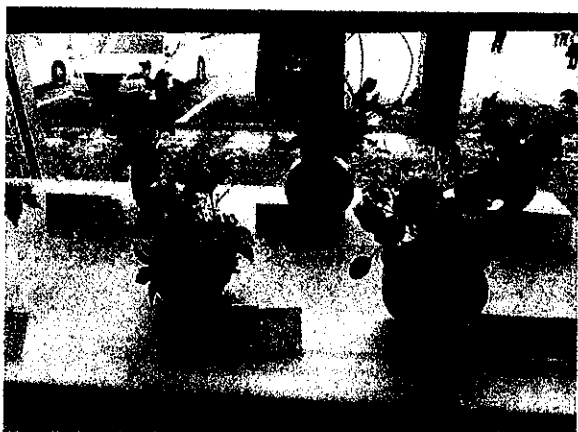
その後の金澤泰子さんの講演は、42歳で授かったわが子がダウン症と告知されて、不幸のどん底で奇跡が起こることを祈りながらの生活の中で自殺を考えたことも・・・そのような逆境からどのようにして、現在、翔子さんが書道家として個性を発揮して生き生きと生活で



(金澤翔子さんの特別揮毫)

きるようになったのかを話してくれました。

保育園から小学校3年までは普通学級で過ごし、親の心配をよそに先生から「翔子さんがいるとクラスの子がやさしくなる」と聞き、素直にこの子と生きて行こうと決心し



(歓迎のメッセージが添えられて

展示された小・中学生の作品)

ますが、小学4年生の時に特別学級の学校へ転校をすすめられ、学校と意見のくいちがいから半年間不登校にさせていただきました。泰子さんは悩み苦しみを書道で紛らわし、翔子さんには難しい漢字が並ぶ般若心経を、厳しく教えながら生活する日々を送ったそうです。それでも翔子さんは、やさしく母親を励ましてくれて、その後翔子さんは、障害者学級に通い友人が出来たことで、苦しんでいたのは親だけだった事に気づき、希望を見失うことなく貫いた結果、光が見えてきた

のです。そして翔子さんが18歳の時に夫が亡くなり、夫が20歳になったら彼女の個展を開くと語っていたことを想い出し、初の個展を開きメディアからも注目され書道家として歩みだします。

不思議と彼女の書を見て涙ぐむ人がいてなぜかと考えると、ダウン症の子は染色体が一つ多いだけでやさしく、無心なので競争心や名誉欲もなく社会の汚染を受けずに育ったことで純粋な魂が宿り、それが見る人の心を揺さぶったのではないかと思ったそうです。愛情を受けてのびのびと成長した翔子さんは、今、一人暮らしを始めて2年になります。その生活は地域の皆さんに支えられ、また活性化に役立っているそうです。

この結果は、障害のない子と同様に将来自立できる子であってほしいと思う親の強い願いが泰子さんの背中を押し、それに答えようとする翔子さんがいたからだと思います。そして親子を受け入れる環境があったことも重要だったと思います。

とにかく困難に直面してもいつか必ず希望の光が見えてくるので決して諦めずに行動すること。先入観や固定概念にとらわれずに障害を個性と受け止め、認め合うことが大切だと思いました。愛情をこめて誰もがそう思える社会が世の中を変えたいと思います。個性を守ることが人権を守ることであり、決して侵害してはならないと強く感じました。

翌日2日目も快晴。9時から各分科会が開かれ、私は人権についての分科会に参加しました。(内容はページを改めてご報告いたします) その前に昨日の記念講演で渡辺 えりさんがウトナイ湖を訪れ、ハクチョウが多く渡来していると話していたので、この機会は二度とないと思い、早朝7時過ぎにタクシーでウトナイ湖に向かいました。しかし残念なことにハクチョウたちはすでに次の中継地に移動してしまい、その姿を見ることができませんでしたが、タクシーの運転手さんは湖畔を案内しながら、不老長寿の果実ハスカップは、むかし苫小牧周辺の湿地帯に自生していたことや(現在は栽培さ

れている)家族の事などを話してくれて、地元の人と交流ができて良かったと思います。

午後はメイン会場で、医師 高橋義男さんの特別講演。子供から高齢者のすべては人間の多様性である。可能性をフル活動させて生きて行かなければならない。思考停止してはならない。多様性が重要であって集団で生きている。障害や貧困を受け入れる社会、ひとりひとりの個性が活かされ、生きがいを感じながら生活できる男女平等参画社会の大切さについて話されました。



(ウトナイ湖)

その後“とまこまい発 男女平等参画社会を語る”と題して記念シンポジウムが開かれ市民・団体、企業、行政の立場で実現に向けそれぞれの役割を認識し、責任をはたし相互に連携をすることが重要であると。出光興産は、社長みずから働きながら育児をする女性社員の生活体験をするなど、積極的な取組みを実践。社員を尊重し育成に力をいれ発展する企業だと思いました。市長は、来年度予算を議会に提出して取り組むことを宣言しました。行政と企業が本気になれば出来ると思います。実現に向けて大変努力していると感じました。神田教授は、市民・団体は自己実現と社会を創るために参画して「協働」する必要がある、「協働」に必要なものは①方向の共有②それぞれの役割を担う③それぞれの立場を理解して知ることだと話していました。

閉会式は、次の開催地である金沢市の実行委員長のあいさつと引き継ぎが行われ、大会宣言が発表され、無事に会議が終了しました。

今回参加して、人間は多様性があるって当然(障害、貧困、人種、性別 etc)でありその人々が支え合い生き生きと生活できる仕組みを作ること。そしてすべての個人の人權が尊重され守られ、それぞれの能力が十分発揮できる社会が男女平等参画社会であると思いました。

目指す社会は容易いものではありませんが、個人・団体、企業、行政のそれぞれの立場で身近な所から変えていくことが重要だと思いました。又、信念を持って諦めずに取組み共に行動すること、その姿勢を未来につなげる努力も必要です。行政、企業の姿勢がおおきく変わることも期待いたします。

今回この様な貴重な経験をさせて頂いたことに感謝いたします。
ありがとうございました。

又、参加する意義を強く感じました。これからもひとりでも多くの人に参加してほしいと思います。

以上

日本女性会議 第3分科会 人権 シンポジウム
「アイヌ民族の過去といま、そして未来」報告書

増淵 則子

日本の先住民族であるアイヌの人々は、自然共生の世界観を持ち、活発な交易を行い独自の言語や文化を継承しながら暮らしてきた。2020年には国立アイヌ民族博物館が白老町に開設されることになり、国内外に向けてのアイヌ文化発信拠点としての期待が高まる。アイヌ民族の歴史を学び、現在の状況を正しく知る中で「人間らしく生きられる社会とは!？」を皆さんと共に考えよう。

出演者

*本田 優子 札幌大学地域共創学群教授 アイヌ文化の一人者
北海道大学文学部史学科日本史専攻課程卒業後、平取町二風谷に移り住む。
札幌大学でアイヌの若者たちに大学進学の手を助けるとともに、民族文化を学ぶ場を提供するウレシパ・プロジェクトを創設。一般社団法人札幌大学ウレシパクラブ代表理事。

*多原 良子 札幌アイヌ協会副会長 アイヌ女性会議メノコモシ代表
30代後半より民族を隠す生き方を自問自答、アイヌを表明し民族に権利回復運動に取り組む。アイヌ生活相談員を約20年務める。
マイノリティ女性の複合差別問題に取り組み、女性差別撤廃委員会日本政府審査委員会を傍聴し「アイヌ女性当事者の声」のレポートを提出してきた。
2017年4月「アイヌ女性会議」を立ち上げた。

*木村 美幸 アイヌ民族博物館専務理事
1959年白老町生まれ。1985年よりアイヌ民族博物館に勤務。
白老地方に伝わる舞踊や歌、信仰礼儀、食文化などのアイヌ文化の伝承活動とともに、物質文化等民族史研究をおこなう。
博物館では人材育成、教育普及事業等を担当。自称「歌って踊れる学芸員」として文化伝承活動、運営をおこなう。

本田教授の講演

北海道の市町村名の8割はアイヌ語に由来している。平取町二風谷の人口8割がアイヌ人。その環境に移り住んで11年間、住民として生活する中でアイヌ文化を学ぶ。

二風谷アイヌ文化資料館長の萱野茂氏のもとで、アイヌ語教室子どもの講師、アイヌ語辞典編纂の助手をする。

I アイヌの世界観と様々な学び

アイヌ文化とは=森・木の文化 樹木=大地を持つ神(樹木が大地を支える)

全てのものに魂が宿り役割がある=川の神、トイレの神、床の神、ストーブの神 etc

役割なく天から降ろされたものはひとつもなく、人間は全てのものからその恵みを受けているので、全てのものに感謝する。自然の中から多くを学び生活していた。「人ありて神あり 神ありて人あり」→ 自然との共生 和人の「自然保護」の考えは傲慢である。

本田さんの二人の子供は、考え方、世界観をここから学ぶ

II 現状とウレシパ・プロジェクトの創設

二風谷時代の願いは①大学進学への道（進学率 25.8%） ②民族教育の場

「差別問題」という視点からの脱却が必要。

札幌大学での取り組み 2009年ウレシパ・プロジェクトを立ち上げる。

ウレシパ奨学生制度・経済的に進学を断念する受験生を支援、

民族文化を学ぶ場の提供

ウレシパ・カンパニー制度・理念に賛同・協力する企業と共に優秀な

アイヌの学生を育て就職の道を開く

現在アイヌ語で生活する人はゼロ → アイヌ文化が子供たちに継がれていない
差別を恐れてアイヌ人と公表しない人、親が隠すので自分がアイヌ人と知らない人が多い。

ウレシパクラブでは、アイヌ文化に興味を持つ和人の学生も参加、多文化共生を実践している。

アイヌ文化の講義をすると、自分の家の習慣と同じで自分がアイヌ人と気づく学生がいる。それを誇り（かっこいい）と思い嬉しかったと言う。

III アイヌ民族およびアイヌ文化の位置づけ

1899年「北海道旧土人保護法」 アイヌ民族を和人に同化するため

明治新政府による同化政策により、アイヌ民族の文化、語学を奪われる。

和人（日本で暮らす一番多い人）として生活することを強制され差別が生まれる。

1997年「アイヌ文化振興法」が施行、同時に旧土人保護法が廃止

2008年 アイヌ民族を先住民と認める、内閣官房のアイヌ総合政策室

アイヌ人口 23,782人（2006年調査）実際はこれより多く正確ではない

2013年 イランカラプテ・キャンペーン アイヌ文化に対する国民の理解を促進するための施策

JR札幌駅にモニュメント設置

2016年 学生達とハワイを訪れた。アイヌ語の再生のためにハワイ語の復活を学ぶ

ハワイ州プーナレオ幼稚園（1983年創設）は全ての教科をハワイ語で学ぶ

「一世代で消えることもあれば、一世代で取り戻すこともできる」

あきらめないで取り組む

学生達が、砂浜で自然とアイヌの歌を歌いながら踊りしだしたことに感動する。

シンポジウム

(木村) 父親がアイヌ人、母親が和人のアイヌ語を話せないアイヌ人で、育った環境から自分はアイヌ人と思った。貧しい家庭で大学進学は考えられなかった。

28歳で病気入院した時に自分を考え、アイヌを学ぼうと決心。

(多原) 両親にアイヌの血が入っている。親戚も同様。30歳後半にアイヌ人を隠す生活に自問する。

(木村) アイヌだから、アイヌのくせにと差別を受ける。時には石を投げられ、蹴飛ばされたこともある。親を恨む。アイヌを観光として伝えるのは嫌だと思ったが、この場で伝えないといけないと思う。三人兄弟の中で、妹は、アイヌは絶対に嫌だ。弟はしょうがないと、意見が違う。

(多原) 家庭内で叔母と母親が差別の体験談を話していた。中学時代は顔や毛深い体で悩み、アイヌが恥ずかしいと思った。同化政策がなければと思う。

(本田) ウレシパクラブの学生は、家庭の中では話せないがここで話せるのでいじめの辛さもなく、吹っ切れた学生たちが集まっている。しかし世間一般はそうではない。自身は和人だが、和人の役割があると思う。差別は政策の問題で日本全体の問題。2008年に政府によりアイヌは先住民と認められ国立民俗館が設立される。世界に向けて発信することだが、それに対して「寝た子を起こすな」と言われた。長い歴史の根深さを感じる。しかしアイヌが日本国民として当たり前に暮らせる社会であってほしい。

(多原) 2002年国連に、人権とジェンダーに関する問題で、複合差別であり女性に対する差別を訴えアイヌ人として参加する。差別とは、相手を同じ人間として見られるか、いなかでアイヌだけでは変えられない。

最後に、人間らしく生きられる社会とは……

お互いに民族の権利を尊厳しつつ、アイヌ、和人らしく生きていくこと。

感想

参加者は110名でした。北海道の特有のテーマと思い参加しました。

アイヌの人々は、今も北海道だけに住んでいるのか、なぜ文化が消滅したのかはつきりと知りませんでした。同化政策と言う国策が根深い差別を国民に植え付け、政策によりアイヌ人が文化を守ることが出来なくなり消滅したことに、行き通りを感じました。二度とあってはならないと思いました。勇気をだしてアイヌ人と宣言して生きている方の発言は問題の深さを感じましたが、アイヌ人としての誇りを持って生きていると思います。私に日本人の誇りはあるのか？と考えてしまいます。又、札幌大学の学生達には、歴史にとらわれない感覚でアイヌ文化の素晴らしさを、若い世代にも広めてほしいと思いました。

アイヌ文化は日本の貴重な文化であり現代社会において、自然を尊び全てのものに感謝して生活する世界観から、沢山学ぶことがあると思いました。全てのものを思いやる心からは、いじめは存在しないと思います。アイヌ文化復活を進めることは、人種が違って日本を作り上げてきた民族であることを理解し共存共生社会を目指す=男女平等参画社会を目指すための一歩にもなると思いました。

以上

日本女性会議 2017 とまこまい に参加して

目黒女性団体連絡会 女性学習グループ 柏木恵美子

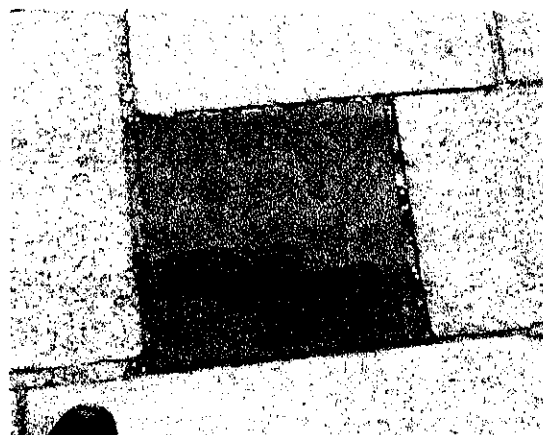
10月13日(金)

工業都市・苫小牧で女性会議？という思いを持って、会議初日の早朝、苫小牧港に到着、前年の北海道旅行の時は苫小牧を素通りしただけだったが、今回は時間があったので、まず、街の散策。メイン通りは『シンボルストリートエリア』、『出光カルチャーパークエリア』に続くサブ通りは『カルチャーストリートエリア』と名付けられ、合計50余りのモニュメントが設置されていて、心豊かになる散歩コースであった。目黒でも、中目黒のゲートタウンの中に10近いアートモニュメントが設置されているが、残念ながら気づかれることも少ないのではないだろうか？出光カルチャーパークは広大で同じ敷地の中に、苫小牧市美術博物館、サンガーデン、中央図書館が隣接しており、企業の文化貢献の大きさを感じた。

メインストリートの歩道のブロックの中に、赤ちゃんの足形と生年月日・名前が彫られたタイルが、何か所も埋め込まれており、地方都市における少子化対策の一つかもしれないが、見ているだけで、心温まるものがあった。このような市民と行政が一緒になった取組みが、2013年に苫小牧市が北海道初の男女平等参画都市宣言を行なうことができたベースになっているのではないだろうか。

散策の後、申し込んでいた『王子製紙工場見学ツアー』（別記）に参加するため、街の中心の『グランドホテルニュー王子』に集合、さすが王子製紙の関連会社とあって、他の多くのビジネスホテルとは一線を欠く豪華なホテルであった。工場はそこから徒歩10分、広大な敷地を持ち、街の一角を占めていた。

午後は目黒から一緒に参加した増渕さんと合流、開会式、基調報告、記念講演に出席。ホテル（市内のホテルは一杯で、私は千歳市の宿を予約）に帰る途中、メインストリートにあった『まちなか交流館』の中の足湯でのんびり！ウエルカムコンサートのオカリナの演奏を聞きながら、暖かなおもてなしに感無量だった。



歩道のタイル



足湯

10月14日(土)

朝、千歳からの電車の中で会議に参加する方々と一緒になり、いろいろ情報交換。地元北海道、山口、沖縄からいらした人もいて、車窓の紅葉を見ながら、話がはずんだ。

今日は楽しみにしていた分科会の日、苫小牧に早めに着いたので、昨日の足湯のコーナーで再度ゆったりし、隣の案内所で苫小牧名物のハスカップティーをごちそうになった。

そして分科会の会場へ、すべての会場が徒歩20分圏内にあり、参加者としてはうれしい。

第7分科会 【平和】シンポジウム

若者から語りはじめる平和と未来

～つながり、共感し、一緒に考え、それぞれの一步を～

女性の学ぶ権利が十分に保障されていないアフガニスタンで生命の危険と隣り合わせで学ぶ女子学生、米軍基地の負担が重くのしかかる沖縄の高校生、そんな若者たちの思いを受け止め、苫小牧の高校生は何を語るのか？

参加したみなさんとともに、21世紀にこそすべての人が平和で人間らしく暮らせる世界を実現するために、私たちが何から始めたらよいかを一緒に考えます。

(パンフレットから抜粋)

コーディネーター

清末 愛砂 (室蘭工業大学准教授)

専門は憲法学・家族法、特に憲法24条戦争や紛争下のジェンダーに基づく暴力に関する法政策、DV法等を研究。

アフガン難民やアフガン女性の支援活動に関わっている

シンポジスト

アフガニスタンの女子学生 2名

沖縄の女子高校生 2名

苫小牧の男子高校生 2名

各々の紹介の後、アフガニスタンの少女二人が、とても素敵な民族衣装で、音楽を演奏してくれた。

彼女たちは戦争で困難な状況にあり、現在、孤児院で生活している。その孤児院では、芸術療法や音楽療法を積極的に取り入れ、子供たちのケアを行っている。そしてたびたび海外に招



かれ、演奏を披露する機会を得ている。

将来の夢を聞かれて、卒業後も学校に戻って、音楽の先生になりたいと微笑んでいた。

沖縄の高校生は、米軍機の騒音のため、授業がままならない状況や、基地闘争に巻き込まれ、7歳の時、国に訴えられた経験等にふれ、戦争をしない、核兵器・軍事飛行機をなくしたいと、彼女らの言葉で話してくれた。そして、もっと、自然と共に生きていける生活がしたい、そして、この国を世界に誇れる国、子供に誇れる国にしたい、と言ったのが印象的だった。

地元の工専、工業高校に通う二人は、日本のITの進歩への夢を語り、女性の社会進出にとっても、AIは重要なことだと思ふと熱く語る半面、北朝鮮のミサイル発射時のアラートを聞いた時の恐怖なども、話してくれ、やはり平和であってほしいと、締めくくった。

それぞれの地域で生活している若者が、その地域の抱える問題、現状の不安、そして、何ができるのか？どうなってほしいのか？を率直に語ってくれた。

大人として、私たちが何をすべきなのかを考えさせられた時間でした。

清末先生は最後に「憲法が理想ではなく、それが現実でなければならない」と発言。

私はアフガニスタンのNPOに関わったりしているが、同時通訳の限界もあり、アフガニスタンの少女たち（13歳と14歳）のいろいろな思いがあまり聞けなかったのが心残りだった。でも彼女たちが日本へ来るため、ビザの取得に始まり、飛行機移動（パキスタン経由）など、非常に困難な状況乗り越えて、遠い中東からこの北の大地まで、私たちのために来てくれたこと思い、感慨深いものがあった。沖縄の女子高校生も自分のことを語るのはあまり気が進まなかったので、会議への参加を躊躇していたが、親に背中を押され、来てくれたとのこと、日本女性会議がこれからも世界に目を向け、平和構築のための一助となれるよう願わずにはいられなかった。

記念シンポジウム

『とまこまい発 男女平等参画社会を語る』

～輝くオールとまこまい“市民・団体の力+企業の力+行政の力”～

シンポジストに2名の企業関係（出光興産KK上席執行役員人事部長、苫小牧埠頭KK取締役総務部長）の方の参加があり、それぞれの社内で男女参画にどう取り組んでいるか、女性の能力を最大限いかすためにどんな事をしているのか、を話して頂いた。

今回の日本女性会議の合言葉“市民・団体の力+企業の力+行政の力”を聞いて、目黒区男女平等参画関連の場において、最近、耳にすることがなかった“企業の力”という言葉・・・少し前は区内でも企業と連携した事業があったと聞くが、現状ではなかなか難しい。今後の目黒で連携するべきは何だろうか、どこだろうか、とまこまいの“企業の力”に代わるものは何かあるだろうか、と考えさせられた。

女性団体連絡会に参加するようになって、まだ半年でわからないことだらけであるが、今回、“2017とまこまい”に参加させていただいたことを機として、目黒区の男女平等共同参画には“市民・活動団体の力+行政の力”はあるが、それにプラスするものは何だろう、大学・各種学校か、目黒に住んでいるたくさんの海外の方か・・・？みんなで一緒に考えて、男女平等参画をもっと確かなものにしていきたいという思いを強く持った。

エクスカージョン

【苦小牧の発展を支え続ける王子製紙苦小牧工場見学ツアー】(10/13)に参加

1910年(明治43年)、当時の最新の設備と技術を取り入れた工場は、東洋一と称され、王子の基盤づくりに大きく貢献。この生産拠点は、苦小牧発展の歴史と切り離すことはできず、地域と共に歩んだ100年超の歴史をご覧ください。

(パンフレットから抜粋)

苦小牧に到着した日の午前、工場見学ツアーに参加。

工場は街の中心、西部に位置し、駅から10分ほどの場所に広大な敷地(札幌ドームを26個分)を持ち、従業員数650名弱。

苦小牧に工場を建設した理由

- ① 広くてたいらな土地であった
- ② 紙の原料となるエゾ松・トド松が近くにたくさんあった
- ③ 紙づくりに必要なきれいな水がたくさんあった
- ④ 支笏湖流域に水力発電所をつくり、電気の確保ができた
- ⑤ 鉄道があり、交通の便がよかった

この工場では、日本の新聞用紙のおよそ3割を生産、1975年には古紙をリサイクルして、原料をつくる設備を建設、また、地球環境の保護をめざし、世界各地で植林を行い、原料となる木材を育てている。

新聞紙を製造している工場内部を見学したが、ほとんど機械化され、広い内部に数人しか作業しておらず、驚かされた。

王子製紙は創業当初から積極的にまちづくりに関わり、現在も総合病院、ホテル等の経営、また植樹祭をおこなったり、様々な形で地域に根ざした活動を展開しているが、男女参画への具体的関わりについては残念ながら、聞きそびれてしまった。見学時間が1時間しか設定されていなくて、敷地内を飛び回るだけで終わってしまったのは残念。しかし、後日のシンポジウムで、地元企業の、出光興産KK、苦小牧埠頭KKの方々のお話を聞き、苦小牧の男女共同参画事業に企業が大きな役割を果たしているということを知った。

日本女性会議2017とまこまい 大会宣言

「北の大地で語ろう これからの未来の一步を」のテーマのもと、男女平等参画社会の実現に向けチャレンジを始めた苫小牧にお集まりいただいたみなさん

「平等・開発・平和」世界にこの目標が掲げられた国際婦人年から42年が経ちました。この間、日本女性会議も34回を数え、私たちは、たくさんの議論を重ねてきましたが、乗り越えなければならない課題がまだ多くあります。

いま、私たちは、少子高齢化が進み、人口減少社会に突入する時代を迎えています。その課題解決のためにも、互いに人権を尊重しあう男女平等参画社会の実現は、社会全体で取り組むべき21世紀のもっとも重要な課題です。

私たちは、これまでも課題と位置付けられながら、時代の変化とともに、更に深く、拡大しているDV、人権、教育、健康、雇用などの身近な問題、災害、平和といった安心できる社会の基礎となるべき問題と向き合いました。これからの男女平等参画社会を目指すために必要なのは、連携と協働です。私たちは、この日本女性会議でそのことを知り確信しました。

私たちは、一人ではありません。この大会でつながった大きな輪を大切にしたいと思えます。私たちは、男女平等参画社会の実現への歩みを着実に進め、平和な未来、一人ひとりが生きやすい社会の”バトン”を子どもたちにつなぎます。

大会の名により、それぞれの立場と役割をふまえて、男女平等参画社会の実現を目指すために宣言します。

- 1 私たちは、お互いの人権を尊重し、生きやすい地域社会をつくるために行動します。
- 1 一人ひとりの個性や能力を活かしながら生活環境も大切に作る働きやすい職場を目指すために行動します。
- 1 男女平等参画社会を目指すための連携や協働を進めるために積極的に行動します。

北の大地からチェンジ！！

2017年10月14日

日本女性会議2017とまこまい